



TITLE:

ホッブズの初期論説「トゥキュディデースの生涯と歴史」について -  
ホッブズ社会哲学の成立過程(2) -

AUTHOR(S):

田中, 秀夫

---

CITATION:

田中, 秀夫. ホッブズの初期論説「トゥキュディデースの生涯と歴史」  
について - ホッブズ社会哲学の成立過程(2) -. 経済論叢 1977, 119(4-5):  
234-254

ISSUE DATE:

1977-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/133694>

RIGHT:

# 經濟論叢

第 119 卷 第 4・5 号

---

マクロ均衡と期待 .....	瀬 地 山 敏	1
ホッブズの初期論説「トゥキュディデース の生涯と歴史」について .....	田 中 秀 夫	20
資本制生産様式と 人間自然・土地自然との関係 .....	梅 垣 邦 胤	41
純粹消費ローンモデルと世代間所得再分配 .....	矢 野 秀 利	60
独占資本主義下の恐慌（循環）の問題 .....	瀧 上 勇 次 郎	74

---

昭和52年 4・5 月

京都大學經濟學會

# ホッブズの初期論説「トゥキュディデース の生涯と歴史」について

——ホッブズ社会哲学の成立過程 (2)——

田 中 秀 夫

## は じ め に

本稿は、前稿<sup>1)</sup>で検討し残した初期ホッブズの小論説「トゥキュディデースの生涯と歴史」<sup>2)</sup>をやや立入って紹介し、1628—9年段階のホッブズの断片的に示されている思想を拾いあげることを通して、前稿から持越した課題である「歴史」がホッブズ社会哲学の成立に対してもった意味を探ろうとするものである。結論的に言えば、初期ホッブズにとって(トゥキュディデース的)「歴史」は人間の本性と(政治的)行為についての確実な知識を提供するものであり、そのかぎり「歴史」の確実性が疑われるにいたれば、放棄される知識形態である。にもかかわらず、ホッブズは後の社会哲学の構想において、トゥキュディデース『戦史』との出会いによって固有のものとしたと思われるいくつかの断片的認識を方法的な合理化を介して再提示していること、以下の紹介から明らかとなるであろう。そして問題なのは、トゥキュディデースからホッブズが何を継承したかを確定することではなく<sup>3)</sup>、逆にホッブズがトゥキュディデースとそ

1) 「ホッブズ社会哲学形成史における『歴史』の意味」, 経済論叢 第117巻5・6号, 1976, 112-132ページ。

2) *English Works* (以下 *E.* と示す), VIII. pp. xiii-xxxii.

3) トウキュディデースの「人間性」概念については、久保正彰「ツキジダスの歴史記述における人間性」, 思想 No. 617, 1975. 11月号を参照されたい。ホッブズは明示的に語るところがないとはいえ、人間性=不変との自明の前提は言うまでもなく、人間と政治へのペシミズムをトゥキュディデースと全面的に共有しており、後者のホッブズへの思想的影響の大きいことは否定できないであろう。但し、個々の観念についてはそのどれをホッブズがトゥキュディデースから継承したかを一義的に確定することは不可能だが。

の作品『戦史』の何に注目しているか、ホッブズが歴史に期したものが何かを顧みることを通して、初期ホッブズの「歴史」への関心と後の社会哲学の形成との方法—内容の両面での内面的関連を明らかにすることである。

## I 権力闘争への視点

小論説「トゥキュディデースの生涯と歴史」は、表題からも明らかなように史家トゥキュディデースの生涯の共感にみちた<sup>4)</sup>描写と『戦史』に体现された歴史叙述の方法についての議論とからなる。前半では史家の生誕・出自、思想形成史、アテネ民主制の崩壊と史家、史家の国家統治論、『戦史』執筆の動機、晩年の国家への貢献と追放、そして死の順に考証的な描写が行なわれ、後半では歴史の「魂」としての「真実」と、その「身体」としての「雄弁術」の両側面から『戦史』論(歴史論)が説かれている。そして後者の「雄弁術」については、「方法」と「文体」の両面から概括的な考察がなされ、さらにギリシャの批評家ディオニュシオスのトゥキュディデース評が詳しく論駁されている。

本節では、このようなホッブズの論述の順序をできるだけ尊重しながら、権力闘争への視点の特徴、〈情念→政治〉論の成熟度を考察し、次節でホッブズの歴史論としての『戦史』論を検討する。

前稿末尾でふれたホッブズがトゥキュディデースを推奨する究極的理由は後にみるようにその君主制論にあるが、それは決して唯一の理由ではなく、前稿でもその一端をみたようにホッブズがトゥキュディデースに寄せる共感はずっと広く深いように思われる。冒頭で史家の出自と思想形成史にふれつつ、ホッブズが強調しているのは、トゥキュディデースは決して無神論者ではないということである。(この小論説は未だ十分な紹介がなされていないため長い引用をする。)

「トゥキュディデースが雄弁術と哲学の研究でえたイソクタイクーン・ソフン 養は、彼の高貴な生れにふさわしいものであった。哲学についていえば、彼はアナクサゴラスの弟子であった。アナクサゴラスは一般民衆の理解をこえる性質の意見をいだいていたために、無

4) Cf. Strauss, *The Political Philosophy of Hobbes*, 1936. p. 59.

神論者だという評価をうけることになった。民衆は、彼らのばかげた宗教について彼らとは異なる考えをいだいたすべての人々を無神論者と呼び、ついに彼の生命をたたせたのである。そしてソクラテスも彼の後に、同様の原因で、同様の運命をこうむった。それゆえ、この彼のもう一人の弟子〔トゥキディデース〕もまた幾人かの人々によって無神論者とみなされたであろうことは、容易にわかる。なぜなら、彼は〔無神論者では〕決してなかったけれども、自然理性の光によって、これらの異教徒の宗教の中に、空虚で迷信的だと思わせるに足るものを見ぬいたであろうこと——そのことだけで民衆の意見では彼は無神論者となった——は、ありうることだからである。<sup>5)</sup>

しかし史家トゥキディデースが無神論者でないことは、史家が戦争の終結時点を神託によって確信していたことからわかる、とホッブズは論拠を挙げて弁護する。ここから推測しうるように、ホッブズのトゥキディデースへの共感、宗教に対する態度にも及んでいる。おそらく上の引用文は1628—9年段階のホッブズの民衆宗教＝ピューリタニズムへの態度として読みかえることができるだろう<sup>6)</sup>。

ホッブズの共感、さらには政治に対する史家の態度決定にも及ぶ。「修辞学」<sup>7)</sup>ではトゥキディデースはアンティポンの弟子であった。したがって彼は偉大なデマゴグになり民衆に対して大なる権威をもつ十分な資格があった。しかし彼は統治に関与する意欲をもたなかった。その理由をホッブズはこう述べる。

「その当時、コモンウェルスにとって適切で利益のある助言を与えることは、何び

5) E. VIII, pp. xiv-xv.

6) このような合理主義的態度は、ホッブズに著しい特徴であり、ギリシャ思想へのコミットメントの深さを示唆するとともに、キリスト教的伝統の近代への対応物としての理神論もホッブズの思想において大きなウェイトをもたないことを示唆するであろう。ホッブズはすでに無神論者の非難を受ける充分な合理主義者であった。ロバートソンによればこのころホッブズは理神論の父ハーバートと交友関係にあった。Robertson, *Hobbes*, 1886, pp. 21-22.

7) シュトラウスは、この「修辞学的伝統」は「哲学的伝統に比し、また哲学的伝統をある程度批判しつつ、歴史家を研究する必要性をつねにせきたててきた」ものであり、ホッブズは、キケロとルキアノスを通してこの修辞学的伝統にふれたと指摘している。Strauss, *op. cit.*, p. 82. 修辞学的伝統と歴史の密接な関連はスミスの『修辞学・文学講義』の内容のかんりの部分が歴史叙述を対象としていることにもうかがえる。後の注29)参照。

とも不可能であり、民衆の不興を招くほかなかったからである。というのは、民衆の意見は、どのような行為を企てようと、自分たちはやり遂げる力をもっており、また容易になし遂げるというものであった、従って、彼らをもっとも危険で絶望的な企てにそそのかすような人々だけが集会を左右し、賢明かつ善良な国民 *commonwealth's men* とみなされたからである。これに対して、彼らに控えめで思慮ある忠告を与える人は憶病と考えられたか、あるいは彼らの力を理解していないと、でなければ彼らの力を悪く思っていると考えられた。そして〔このことは〕驚くにあたらない。なぜなら多大の繁栄（彼らは今では長年のあいだそれに慣れてきている）のため、人々は自分自身を愛するようになっているからであり、自分自身を愛するのをより少くせよ、と忠告する人を愛することはだれにとっても難しいからである。そしてそのことは、一人のばあいより、群衆についてはるかに多くあてはまる。なぜなら、自分自身で合理的に思考する者は、より強力な提案を準備するために、臆病な提案を何ら恥じずに認めるであろう。しかし群衆の前での公の審議においては、恐怖（それは実行を十分に強いはしないが、たいがいよく忠告する）はめったに、またはほとんど、表われなしか、認められないからである。このようにして、アテネ人たちは何事をなすこともできると考えたために、邪悪な者とおべっか使いとが彼らを破滅させることになる行為へとまっさかさまに彼らを駆りたてたのである。そして善良な人々はあえて異を唱えなかったか、もし異を唱えたとすれば身を滅ぼしたかであった。悪に加担した者の一人でも悪を身にこうむった者の一人でもありえなかったトゥキェディデースは、それゆえ、集会に加わることを控えたのであって、めだって裕福な人であったことと彼が企図した歴史の著述とがゆるすかぎり、私的な生活〔にひきこもること〕を決意したのであった。〕<sup>6)</sup>

トゥキェディデースの政治に直接関与しないという態度決定は、内乱へと傾斜しつつあるイングランドに『戦史』翻訳を警鐘として公刊しようとしている<sup>9)</sup> 学者ホッブズの政治への態度決定をいかほどか反映したものとして語られ

8) E. VIII, pp. xv-xvi.

9) 死を予感しつつ84歳で執筆した『自伝』の中でホッブズは、彼が親しんだ古典的作家のなかには「トゥキェディデースのように私を喜ばした者はなかった。民衆統治は愚かなことであり、

ている、と思われる。

それ以上にここで注目したいのは上の引用文にみられるホッブズの権力闘争への注目である。引用文はアテネ民主制崩壊史のトゥキディデースを介してのホッブズの理解であるが、したがってもちろんそれに対応した記述を例えば『リヴァイアサン』の自然状態論<sup>10)</sup>に見出すことはできないけれども、いくつかのホッブズ特有の観点——社会哲学の構想に使用される観点——を拾いあげることができる。第一に「どのような行為を企てようとやりとげる力をもっている」とのいはば〈自惚れ〉と「実行を十分に強いはしないが、たいがいよく忠告する」「恐怖」とのアンティ・テーゼがそれである<sup>11)</sup>。前者は「邪悪な者とおべっか使い」によって「もっとも危険で絶望的な企て」、彼らを破滅させることになる行為に人々が駆りたてられる原因となる。第二に、「自分自身を愛する」ことは「多大の繁栄」がもたらしたのではあるが、いはばその〈自愛心〉は抑制し難い強固な情念であり他人の忠告をききいれるものではないとの観念がみられる<sup>12)</sup>。第三に、人間は「何事をなすこともできる」との〈自惚れ〉をもつ者〔＝一般民衆〕、「邪悪な者とおべっか使い」〔＝「集会を左右する」デマゴグ〕、「控えめで思慮ある忠告を与える人」を含む「善良な人々」の三類型<sup>13)</sup>にわけられ、権力闘争はデマゴグのイニシアティブに民衆が追随し、「善良な人々」を巻き込みつつ破滅に終ると把握されている。第四に同じ「恐

一人の王は共和国よりも賢明である、と彼は言う」と回顧的に語っているが、これは単なる思い返しではない。またおそらくホッブズはすでに「民衆の意見」が支持し、拠点とした伝統的「混合統治」論の批判者である。*The Life of Mr. Thomas Hobbes of Malmesbury*, 1680, p. 4. (この文献は藤原保信氏の御好意によりみることができた)。Cf. Robertson, *op. cit.*, p. 23.

10) とくに『リヴァイアサン』の自然状態論の戦争状態としての描写に『戦史』の記述が部分的に利用されたことは否定できないと思われる。例えば、久保正彰訳『戦史』(中)100-104ページのケルキューラの内乱の記述、291ページの戦争のとらえ方を参照。久保正彰、前掲論文。

11) これがシュトラウスの言う虚栄心—(暴力死の)恐怖のアンティ・テーゼの原型である。前掲拙稿119ページ参照。

12) 人間を〈自愛心〉の、ないしは自己中心的な存在として把握する視点の確立をここにみることができるだろう。

13) 彼の社会哲学の自然状態論では「穏和人」とそうでない者との二類型が示されている。Cf. *Elements of Law*, ed. by Tönnies, 1889, p. 71. *De Cive*, E. II, p. 7. *Leviathan*. 水田・田中訳、84ページ。

怖」の情念も、一人の場合には「よく忠告」するが、群衆を前にした公の審議では「恥ずかしい」という感情に阻まれるとの観念があり、この観念は当然民主制より君主制の方を合理的とするであろう。そしてこのようなホッブズの観念を成立させている基本的発想は、人間を情念に動かされる存在としてとらえるものであり、ホッブズの政治＝権力闘争への視点を〈情念→政治〉論<sup>14)</sup>と称してよいだろう。

このようなホッブズの〈情念→政治〉論はトゥキディデースの統治観の紹介において間接的にはあるが、統治形態の比較論に具体化されている。

「国家 state の統治にかんする彼の意見についていえば、彼が民主制をもっとも好まなかったことは明らかである。そしてさまざまな機会に彼は次のことを書きとめている。すなわち、デマゴグたちが、名声と知恵の栄光をもとめて対抗し<sup>ジョンソン</sup>続いたこと。彼らが相互に助言をぶつけ合うことによって、公衆に損害を与えたこと。雄弁家たちの目的がちがひ、修辞の力に差があるために、決議が混乱に陥ったこと。そして権威に関する既得物を新たに手に入れるか、あるいは固守して、一般民衆のあいだに勢力をふるおうと望んだ者の、へつらった忠告にもとづいて、絶望的なもろもろの行為が企てられたこと、をである。だからといって彼〔トゥキディデース〕が、少数者の権威を強調したとは思われない。つまり、彼の言うには、少数者の間では各人は第一人者になることを望み、過少評価をうけた人は民主制の**ばあ**いよりも**我慢**がならず、そのために動乱が生じ、統治は解体するのである。彼は**少数者**と**多数者**とが混合されていた時代のアテネの統治を讃えている。しかしそれ以上に彼が讃えているのはペイシストラトウスの統治時代（それが篡奪された権力であることは別として）、およびこの戦争〔ペロポネソス戦争〕の始まったとき——それは名目上は民主的であったが事実上ペリクレスのもとに君主制であった——の双方〔の統治〕であ

14) このような政治（社会）現象へのアプローチの仕方（これは政策論的には情念を「権力的な統制の問題」と把握したマキャヴェルリ、ボダンの継承であろう。佐々木毅『主権・抵抗権・寛容』1973、302ページ参照）は、ギリシャ（トゥキディデース）以来の伝統的方法であり、ホッブズの独自性はこの方法自体にもとめることはできず、この方法によって把握されたペシミスティックな人間像、情念の特性把握にこそある。そしてホッブズのペシミズムはこの小説に十分に示されていると言ってよいだろう。Cf. *De Cive*, E. II, pp. 2-3.



る。このようにみると、彼は王家の出身として、王による統治を最高のもものと認めたのだと思われる。それゆえ彼がコモンウェルスの仕事にできるだけ関与しなかったとしても驚くべきことではない。むしろ彼は、コモンウェルスの<sup>マニジグ</sup>管理を担当した人々が何をなしたかを観察し、記録することに、身をゆだねたのであった。』<sup>15)</sup>

このようにトゥキュディデースの統治観をその著作からホッブズは引だしているのであるが、ホッブズがトゥキュディデースの記録した事実から民主制と貴族制とが容易に権力闘争によって解体される不安定な統治形態であることは充分明らかだと考えていることはほぼ間違いないだろう。先の引用文とこの引用文とからホッブズの君主制支持は充分推定しうるが、しかしその理由は積極的に説明されているとはいえない。だが先の引用文にみられた〈情念→政治〉論は「恐怖」という情念の「よく忠告する」という特性が発揮されるのは「公の審議」ではなく一人の場合だと語ることによって、〈情念→政治〉論の論理において君主制の優位を当然示唆するものであった。しかしまたホッブズがそれを充分な論拠と考えなかったことは、ここでトゥキュディデースの君主制支持理由をその出自に帰していることから明らかであろう<sup>16)</sup>。ともあれこの段階のホッブズにとって『戦史』の叙述する歴史的事実が君主制の優位を充分に示していると考えられていたと結論できるとと思われる<sup>17)</sup>。

前半部は以下、史家トゥキュディデースの『戦史』執筆の動機、晩年の戦略家としての貢献とそれにもかかわらず国外追放に処されたこと、史家の末期を共感をもって描いているが、ここでは国外追放にふれた箇所を取りあげるにとどめる。

「彼を追放した張本人は、当時にあってもっともひどい追従者であり、そのために

15) E. VIII, pp. xvi-xvii.

16) ホッブズが君主制優位論の論証できなかったことを告白したのは周知の通りである。Cf. *De Cive*, E. II, p. xxii.

17) この引用文から引だしうることは以上でつぎるわけではないが、いま一点「目的の相違」から「決議の対立」が不可避的に生じるとの観点に注目しておきたい。例えば『法学要綱』では（他の二著作でも基本的には同じであるが）「情念の相違」と「人間の自然的平等」とから「敵意と戦争の状態」が演繹されているのである。*Elements*, pp. 70-73.

またもっとも民衆うけのよい弁士クレオンだった。指揮において用意周到さも勇氣もともに欠いてはいるが、成行がまちがってうまく行くばあい、出来事にもとづいてのみ判断する人には、誹謗の道がつねに開かれており、そして嫉妬 *envy* は、公共善 *public good* への熱意とみせかけて、容易に非難するための信用（民衆の支持）をみいだすものだからである。』<sup>18)</sup>

次節でも「嫉妬」が戦争の原因であるとのホッブズの（トゥキュディデースと共有する）観念をみるが、ここでの「嫉妬」の取り扱いも注目されてよい。またここでも前稿第II節でふれたような民衆への不信感が読み取りうる。すでにみた民衆の意見ではトゥキュディデースも無神論者とされたとの発言、および一般民衆は邪悪なおべっか使いによって破滅へ駆りたてられるとの発言を拾いあげてみると、一見ホッブズは民衆の愚かさばかりを強調しているかにみえる。そして民衆をおよそ信頼も尊重もしていないことは確かである。しかしこのような民衆観は先験的愚民観ではなく、貴族社会の家庭教師であるホッブズの限界を意味するとともにホッブズの冷静な経験的観察の当然の帰結であると考えべきであろう。この民衆観の背後にあるのはおそらく当時のピューリタンである。だがホッブズがもっとも強い非難の眼を向けているのは上の引用文のクレオンのような「名声と知恵の栄光」を求める「邪悪な者とおべっか使い」であり<sup>19)</sup>、彼らこそ「公共善への熱意とみせかけて」、「公衆に損害を与え」、「善良な人々」をも「名声と知恵の栄光」をめぐる「対抗」と「競争」に巻き込みつつ、結局「一般民衆」を破滅に追い落とすのである。とすれば「一般民衆」＝ピューリタンをホッブズは被害者にとらえていることになる。

では加害者＝デマゴグ＝クレオンは誰であろうか。ロバートソンは「クレオンに代ってそこにエリオットかビムの名前が書かれてもよかった」と言っているが<sup>20)</sup>、この発言には単なる推測以上のものがあると言ってよいだろう

18) *E. VIII*, pp. xviii–xix.

19) Cf. *Lev.*, 水田・田中訳, 35–36 ページ。ホッブズは無知（＝民衆）より背理（＝デマゴグ）をより非難する点でも一貫している。

20) Robertson, *op. cit.*, p. 24.

ここでふたたびロバートソンの言葉を引用して、次にロバートソンも充分な検討の眼を注がなかったホッブズの方法論的視点からの『戦史』論を検討しなければならない。——「悠然とした研究の時期の終るとき、彼は40歳にして、よく事情に通じた人であり学者でさえあった。政治観は不安をもっていたが、哲学においては未だ一般的関心としてではあるが人間性についてなされた彼の観察の多くを深めつつあった。たぶん彼のもっとも特徴的な意見のいくつかは形成されていた。しかしすべては緊張を欠いたまま彼の心の中に横たわっていた。」<sup>[22]</sup>

歴史の「身体」としての「雄弁術」はさらに「配列または方法」(disposition or method)と「文体」(style)とが考察されるべきとして、まずホップズはこ

23) *E.* VIII. pp. xx-xxi.

う説明している。

「第一巻で彼はまず序説を通して、ギリシャの状態をその揺籃から彼が書き始めた当時の繁栄した姿にいたるまで描き出している。そして次に彼が書く予定であった戦争の真の原因とみせかけの原因とを断定している。戦争そのものを扱っている残りの部分で、彼は明確かつ純粋に一貫して時の順序に従い、年々何が生じたかを述べ、しかも年々を夏と冬とに分けている。彼は叙述的に各行為の根拠と動機を行為そのものの前に置くか、それとも、工夫をこらしてコモンウェルスにおいてその時々にあからさまに支配力を行使している諸人物がおこなう討議演説 deliberative oration の形式に組みいれている。行為が生じたのち、その時こそ、彼がそれらの行為について彼の判断を下し、どのような手段・方法で成功が促進されたか、あるいは妨げられたかを示すまさにその機会なのである。教訓を与えるために〔叙述の本筋から〕それたり、またそうした戒めを公然と伝えること（これは哲学者の領分だ）をトゥキディデースは決して用いない。叙述は良き助言と悪しき助言の方法と結果を人々の眼前にきわめて明瞭に示すものだから、叙述そのものこそ読者にそれとなく教訓を与えるのであって、戒めによる以上に効果的に教訓を与えるのである。」<sup>24)</sup>

歴史の効用が行為の動機＝原因→行為の結果の因果認識に基礎づけられていることは、前稿でもふれた通りである。その効用とは引用文に語られているように「どのような手段・方法で成功が助長されたか、あるいは妨げられたかを示す」ことに他ならず、したがってホッブズの関心は「成功」をもたらしすべき「手段・方法」に向けられている<sup>25)</sup>。

だが「成功」とは何であろうか。ペロポネーソス戦争はギリシャ世界（ヘラス）内の戦争であったにせよ、ポリス間の対外戦争であった。とすれば対外的権力闘争に勝利することが「成功」なのであろうか。引用文の文脈はそう示唆するであろう。一見ホッブズの関心はアテネの内政史（民主制の解体→内乱）に据えられているかにみえるが、対外的権力政策への関心はここに脈打っている

24) *Ibid.*, pp. xxi-xxii.

25) （政治的）行為の規準としての「成功」はすでにマキャヴェルリ、ボダンが主張した。

Cf. Meinecke, *Die Idee der Staatsräson*, 3 Aufl., 1963, S. 71. 邦訳81ページ。

とみななければならない<sup>26)</sup>。だが行為が範にとるべき規準としての「成功」は単にそのようなものとのみ理解されてよいだろうか。この引用文で伝統的道徳哲学の効力が否定されていることから推定しうるように、「成功」を規準とする行為の因果関係の判断は古き〈理性の戒律〉にとって代るべきものであり、その限り広くはあらゆる行為の判断基準とされていると解すべきであろう<sup>27)</sup>。とすれば後のホッブズにおいてはこの個別的にしか判断されない抽象的「成功」が一般的態度としての新しい自然法に具体化され取って代られることになると思われることができる。

このようにホッブズにとって歴史は事實的因果関係によって行為の規範＝規準を教えるものであるが、ホッブズが「成功」は総てを正当化すると赤裸々な自然主義に立脚するものでないことは前節でみたクレオンにふれた引用文が示唆するであろう。

この引用文の語る『戦史』の「配列または方法」については、続いて述べられている文体論の後に開説されているディオニュシオスの比評とそれに対するホッブズの論駁が問題点を明示している。

トゥキュディデースの文体については、「幾人かの古代の有能な鑑識家の判断」に言及するとして、プルタークの引用から「明晰さ」、キケロから用語の「重厚さと威厳」および文体の「簡潔さと力強さ」、そしてディオニュシオスから用語の「純粋さと適切さ」をそれぞれ引証し、『戦史』を読んだ読者にはこ

26) 20年代末以来ホッブズは熱心な国内政治情勢の注視者であるとともに、第二・三回目の大陸旅行(1629-31, 34-37)ではリシュリユーによる中央集権的絶対主義国家政策を眼にし、また30年戦争の動向にも注意を払っていることが想起されるべきであろう。E. VII, pp. 451-2. Lips, *Die Stellung des Thomas Hobbes zu den politischen Parteien der grossen englischen Revolution*, 1927. S. 24. 田村秀夫「ホッブズ『リヴァイアサン』の背景」経商論纂第39号, 1951, 97-8ページ参照。

27) シュトラウスは16世紀の文献に、戒律の効力の疑問にもとづく哲学的戒律と歴史的実例の対立が瀕出することを指摘し、時代の思想的関心の転換をとくに典型としてベーコンをとりあげて検討しつつ、哲学→歴史の関心移転の究極的理由を民衆が超越的規範に従わなくなったという事実に見出している。そしてその事実を基礎として規範の適用性が学問上の根本問題となったのであり、ホッブズはベーコンからこの適用性の観点をうけつぎ、またリブシウス(後の注40)を参照)を通して16世紀のこの転換を知ったと、シュトラウスはとらえる。Strauss, *op. cit.*, pp. 82-95

のような証言は不要だとして、ここでは簡単にきりあげ、詳しくは最後にとりあげている<sup>28)</sup>。

さてこのディオニュシオス<sup>29)</sup>の批評——それはヘロドトスとトゥキュディデースの比較論によって前者の優位を主張する——は歴史家の職務、素材の選択にも及んでおり、したがってホブズの歴史に期すところもその論駁においてより具体的にうかがうことができる。

#### 第1点。歴史の目的と素材の選択について。

ディオニュシオスによれば、歴史家の根本的でもっとも必要な職務は、高潔な、読者にとって喜ばしい議論を選ぶことであり、トゥキュディデースは名譽あるものでも幸運なものでもなく、また後世に記憶してほしくもない戦争だけを描いている。ギリシャ人の哀れであり怖ろしい災難よりギリシャ人と異邦人とのすばらしい行為を記述したヘロドトスは議論の選択でトゥキュディデースよりはるかに賢明であった。ホブズは反論する。

「歴史を書く者の根本的でもっとも必要な職務は、歴史家個人の力の範囲内でよく取り扱えるとともに、それを読むであろう後世の人々に利益のあるような議論をとりあげることである、と主張する方がより理にかなっていないかどうか、考えてもらいたい。すべての人々の意見では、そのことをトゥキュディデースの方がヘロドトスより上手になしたのである。なぜなら、ヘロドトスが、自分でその真相を知りうべくもないものごとを書こうとし、また真実で心を満足させるよりもむしろ伝説的な物語りで〔聴衆の〕耳を楽しませるものごとを書こうとしたのに対して、トゥキュディデー

28) E. VIII, pp. xxii-xxiii, このような「文体」への注目も、社会科学への方向をもつものとしてホブズ社会哲学を把握する視念に立つかぎり、留意すべき点であろう。第一に「明晰さ」を指摘している点も無視できない。

29) Dionysius of Halicarnassus, AD 1世紀頃のギリシャの修辞学者・歴史家。ディオニュシオスからの引用に限りホブズは出典を記していないが、評論「ポンペイウスの手紙」からのものと思われる。Cf. ベリー、高山訳『古代ギリシャの歴史家たち』、1966、未来社、75ページ。本稿と直接には関係がないが、のちにスミスもグラズゴウ大学講義において同じ文献を参照しつつトゥキュディデースを論じているが、ホブズとは興味深い見解の一致と差異を示している。以下の注31) 35) 37)参照。

スは、一つの戦争を叙述しているのであって、発端から終結まで戦争がいかに行なわれたかを、確実に知りえたからである。しかも彼は、その序文において、その戦争で生じた惨事を提示することによって、それが巨大な戦争であり、知られるに値いすることを示している。そして当時ギリシャ人にふりかかった災難が後世の人々に隠されるべきではなく、むしろ彼らに真に伝えられるべきであるのは、人々は繁栄より不幸な出来事を見ることによって、より多くの利益を得るからである。それゆえ、人々の良き成功よりむしろその悲惨こそきわめて多くの教訓を与えるものである。だからこそ、ヘロドトスが彼の議論の選択において賢明であったというよりはむしろ、トゥキュディデースは、彼の議論をとりあげたことにおいてはるかに幸福だったのである。」<sup>30)</sup>

ホッブズが歴史の第一の必要条件を確実な事実認識においていることは再論する必要がないだろう。ここに新たに語られていることはホッブズのいはば〈功利主義的ペシミズム〉とでもいうべき素材選択の視点である。確実な事実認識を基礎としかつ読者に利益を与えるべき歴史は、その素材に「悲惨」を選ぶことによって最も効果を高めることができるとホッブズは言うのである<sup>31)</sup>。しかしだからといって素材の選択が恣意的であってよいというのではないであろう。ディオニュシオスの批評も一面ではこの点をついている。この点は第II、第III点で明らかにされる。

第II点。叙述の公正または客観性について。

30) E. VIII, pp. xxiii-xxiv.

31) この点についてスミスは、両者の見解をいはば総合する立場に立って、歴史の目的に読者を楽しませることと教訓を与えることを数えるが、単に楽しみを与えることは虚構の物語りでも可能であり、事実の叙述でなければ歴史書といえず、それでは「将来の行動の計画を立てるうえで役に立たない」として、歴史の本質をホッブズと同じく実証性→効用にみている。Adam Smith, *Rhetoric and Belles Lettres*, ed. by J. M. Lothian, 1963. pp. 85-6. 宇山訳『アダム・スミス修辞学・文学講義』1972, 203ページ。またスミスは、歴史叙述の土台をなすのは「もっとも私たちの注意をひき、私たちの心にもっとも深い印象を生みださせる」行為、すなわち「不運な」種類の行為だとする点で、ホッブズの悲惨重視とひびきあうところがあるが、ホッブズが悲惨をただちに効用に結びつけるのに対し、スミスはその理由を人間の「共感」の特性・構造に探っている。Ibid., pp. 80-81, 85. 邦訳、同、195-6, 202-3ページ。このような両者の視点の共通性と差異は立脚点としての市民社会の成熟度を反映している。

ディオニュシオスによれば、歴史家の次の職務は適切な叙述の範囲を知ることである。ヘロドトスがこの点で優れているのは、彼は異邦人がギリシャ人を侵害するにいたった原因をまず指摘し、異邦人への制裁と復讐で終わっているからである。しかしトゥキュディデースはギリシャ人の良い状態から始めている。ギリシャ人にしてアテネ人であった彼はそうすべきでなかった。また彼はアテネ人に対し威厳をもつ者として彼の都市の側での戦争の過失をそれほど明らかに指摘するべきでもなかった。彼は愛国者としてペルシャ戦争直後の彼の祖国の高貴な行為から始めたのちラケダイモン人が他の原因からとみせかけて、嫉妬と恐怖とから戦争をしかけたことへと入るべきであった。彼の歴史を終るにあたって彼は誤まりを犯しており、追放されたアテネ人が歓喜にみちた帰還をなしとげアテネが自由を回復した時点で終るべきであった。このような調子でディオニュシオスはトゥキュディデースの愛国心の欠如を非難するのであるが、ホッブズはこう論駁する。

「これに対して私は、こう主張する。ギリシャ人が当時良い状態におかれていようと悪い状態におかれていようと、その戦争の諸原因以上には遡らずに叙述を始めることが、ペロポネソス戦争の歴史を書く者と企図した者の義務であった、と。そしてもし戦争をひきおこしたとされる侵害がアテネ人の手になるものであれば、著者は、アテネ人にて祖国に誉ある身にせよ、その通り言明するのが当然であって、いかに手近にその理由を求められても、その過失を転嫁すべき他の理由を捜したり主張してはならない。そして彼がそれについて書いているところの戦争にふくまれる時点の前になされた諸行為は、いかに高貴なものであれ、ただ粗略にふれられるべきであって、後統の歴史の照明に役立つかもしれないというにとどまる。そのことに彼がこのように粗略にふれている場合、どちら側にも感情をこめずになすべきだったし、彼の祖国<sup>オナトリー</sup>を愛する者としてではなく、真実を愛する者としてなすべきだった。そして後の展開においても、同じ冷静さをもってなすべきだった。さらに、彼が叙述することを企てた戦争が終るところで、叙述を終えるべきであり、その時期——それに続いたことは決してさほど感嘆すべきことでも喜ばしいことでもなかったが——をこえて彼の歴史



を作成してはならなかった。これらすべてのことをトゥキュディデースは守ったのである。」<sup>32)</sup>

ホップズの反論は要するに叙述の対象自体がおのずから叙述すべき範囲を示すのであり、歴史家は選ばれた対象を私情＝愛国心を交えずに事実即して客観的に描かなければならない、というにつきる。したがってトゥキュディデースは戦争という「悲惨」しか描いていないとのディオニュシオスの非難は、トゥキュディデースの叙述の対象がペロポネーソス戦争だったから当然だと一蹴されることになる。さらにホップズはディオニュシオスが「歴史の主要かつ根本的な徳」について判断を誤っていると強く断罪する、——「なぜなら、彼は歴史の目的を、真実の叙述による利益ではなく、あたかも唱歌でもあるかのごとくに、聴衆の歓喜としているからである。そして歴史の議論の中に、彼は決して祖国の災難と惨事とを含めようとはしない。それらを彼は沈黙のうちに葬ろうとするのであって、ただ彼らの輝かしい光栄ある諸行為だけを論じるのである。歴史家の徳のなかに、彼は祖国への愛情、聴衆を楽しませる研究、彼の議論から導き出される範囲をこえて書くこと、および彼の祖国に不名誉なすべての行為を隠蔽すること、以上の点を数えている。〔これらは〕もっとも明白な悪徳である」と。このように論じてホップズはこの論点をルキアノスの有名な文章<sup>33)</sup>を引用して結ぶ。ここにはオブティミストとペシミストの全面的な対立が語られている。

第III点。年代記的方法による総体把握について。

ディオニュシオスはこう批判する。トゥキュディデースは行為の完結する期間より時そのものに支配されているため、しばしば包囲攻撃、動乱、戦争等の叙述を中断したまま、別の地域で同時に生じた他の行為の叙述へと入って行き、時が要請すればふたたび元にもどるを余儀なくされている。このことが聴衆の

32) E. VIII, pp. xxiv-xxvi.

33) *Ibid.*, p. xxvi.

心に混乱をひき起すため、歴史のいくつかの部分が明瞭に理解できなくなる、と。これはかなり正当な批判だと思われるが、ホッブズは次のように簡単に反論して済ませる。

「実際、誰であれ彼を一度注意して読むなら、他の方法以上にこの方法によってより明確に各行為を想い描くことであろう。そしてその方法はより自然である。彼の目的はペロポネーソス戦争一つを叙述することだったので、このようにして彼はそのすべての部分を一つの総体に統合したのであり、そのために全体における統一があり、いくつかの叙述はただ全体の部分としてのみ考えられているのである。」<sup>34)</sup>

ディオニュシオスの正当な批判も、トゥキュディデースの年代記的・総合的叙述以上に対象をよりよく理解させる叙述方法はないとのこれまた正当と思われる反論の前には無力であろう<sup>35)</sup>。ここでホッブズが対象の総体把握の視点と、そのための部分—総体の合理的な理解、すなわち、総体は諸部分から成っているのだが、各部分は総体との関連で把握されるべきことに注目している点を見すごしてはならないであろう。このようにホッブズは『戦史』を決して単なる史実の羅列ではなく、総体把握の展望に立って各行為を関連づけたいわば合理的歴史とみ、この面からも『戦史』を高く評価するのである。第IV点はこの総体把握の展望にかかわる。

第IV点。『戦史』第I部の方法について。

ディオニュシオスは、戦争の真の原因——「それはラケダイモン人によって恐れられ嫉妬されたアテネの領土の巨大さであった」——を取り扱うに先立って、ギリシャのそれまでの歴史を素描し、続いてケルキューラとボテイダイアに関する紛争の叙述に入っている『戦史』第I部の方法を非難する。ホッブズはこう反論する。

34) *Ibid.*, p. xxvii.

35) この点についてのスミスの議論はもっと詳しいが、基本的にホッブズと同意見である。

Cf. Smith, *op. cit.*, pp. 93-4. 宇山訳215-6ページ。

「彼はギリシャの古代の状態について叙述するにあたって、手短かに述べ、以下の歴史をよく理解するに必要なことにどこまでもかぎっている。なぜなら、これらの初期時代についての一般的観念なしには、歴史に含まれる多くの地域を理解することがよりむづかしくなるからである。〔その理解は〕個々の都市と慣習の起源についての知識にかかっているが、それは歴史そのものに挿入されえず、読者に予備知識があると想定されるか、それとも不可欠な序文として冒頭で読者に伝えられなければならない。そして彼がこの戦争の公然と言明された原因についてまず叙述し、その後この戦争の真の・内的動機を論じていることについて非難することは、ばかげている。なぜなら、吐露され公言された戦争の原因〔を示すこと〕は、いかにささいなものであれ、戦争そのものに劣らず歴史家の仕事に属するからである。なぜなら、口実なしには、いかなる戦争も生じないからである。この口実はつねに侵害を受けたこと、または受けたと偽ることである。しかし、敵意への内的動機はたんに推測的なものにすぎず、他の国家の巨大さへの嫉妬、またはやがて侵害される〔かもしれない〕という恐怖といった歴史家がつねに注意しなければならない証拠ではない。さて良き歴史の著者が戦争の根本原因として、公言された侵害を扱うべきか、それとも隠された嫉妬を扱うべきか、判断してもらいたい。」<sup>36)</sup>

問題は二つである。第一にペロポネーソス戦争の総体を理解するために必要な限りで、ギリシャの古代の情勢（地理、都市と慣習）が最初に概説されるべきこと。第二に戦争の原因（みせかけの原因と真の原因）が究明されるべきこと<sup>37)</sup>。後者について、注目すべきは、ホップズが戦争原因を侵害に帰す正戦論を拒否し、他国の強さへの嫉妬と恐怖に真の原因を（トゥキュディデースとともに）帰している点である。

36) E. VIII, pp. xxvii-xxviii.

37) 原因の取り扱いについても、スミスの議論ははるかに詳しい。Smith, *op. cit.*, pp. 86-88. 宇山訳、204-207ページ。なおホップズとスミスとの共通点として、歴史に行為の動機についての知識を教えるという効用を認めていることに注目しておきたい。Cf. *Ibid.*, p. 109. 宇山訳、238ページ。またスミスは『戦史』ラテン語本を所蔵している（*Adam Smith Library*, by H. Mizuta, 1967. p. 146）が、それがホップズの批判した版本かどうか、またホップズの訳本をみたかどうか、わからない。

「方法」についてのホッブズのディオニュシオス批判はなお二点を残すが、細部にかんするものであり、省略する。

最後にディオニュシオスによる「文体」についての非難をホッブズは論駁してこの小論説を終るのだが、興味深い文章をもう一つ引用しておきたい。まずディオニュシオスは『戦史』に無数の曖昧かつ破格の文章があると非難するのに対して、ホッブズはこう主張する。

「なるほど彼にはいくぶん長い文章がいくつかある。しかし注意深い人には曖昧でないし、しかもその数はほんの少しである。だが、これが彼の見出しているもっとも重要な欠点なのである。それ以外については、曖昧さは、見ぬふりをされるかそれとも通常は論じられないが、しかし社交 public conversation 上で人々をもっとも左右するところの人間の諸情念 human passions についての熟考を含む文章の深遠さから生じているのである。だから、人がじっくり考えずにそれらの文章〔の真意〕を洞察できないからには、私たちは一読してそれらの文章を人が理解すると期待すべきではない。彼〔トゥキュディデース〕は目的を曖昧にしたために、一般民衆は彼を理解できなかったであろうと、マルケリヌスは言っている。そして〔このことは〕ありうることである。なぜなら、賢明な者は、（すべての人々によって理解される言葉ではあるが）、賢明な人々だけが彼を賞讃することができるように書くはずだからである。しかしこの曖昧さは、なされたものごとの叙述にあるのでもなければ、地域または戦闘の記述にも、トゥキュディデースがもっとも明察していたすべて〔の記述〕にも、あるわけではない。……しかし、人々の気質と態度を特徴づけ、そしてそれらの特徴を結果たる事件と結びつけるばあい、ある人が彼の心をどのような言葉で伝えるのである、<sup>オーディタリー・キヤバシティーズ</sup> 普通 の 能 力 の人々には曖昧たらざるをえない。それゆえ、もしトゥキュディデースが彼の演説において、あるいは動乱またはその種の他の出来事を記述するばあい、容易に理解されないとすれば、それはこのような出来事の本性を洞察できない人々だけにいえるのであり、表現の複雑さから生じているのではない。」<sup>38)</sup>

「人間の諸情念」についてのトゥキュディデースの洞察は一般民衆には理解

38) E. VIII, pp. xxix-xxx.

できないが、ホッブズ自身には理解できるとこの傲慢不遜な態度は注目に値する。ここでは明確に「普通の能力の人々」はその能力ゆえに「歴史」を読む資格を拒否されているのである。初期ホッブズの到達点はここにその限界を充分示しているとできよう。だが後のホッブズは一般民衆にも理性的認識能力をみとめなかったであろうか<sup>39)</sup>。ここでは問題を提出しておくにとどめよう。

続いてホッブズは修辞学者のいわゆる対句法が人物描写に適切な手法であり、人物の比較論にとってほとんど唯一の文体であること、また破格の文章もトゥキュディデースの文体をより効果的たらしめていること、および彼の雄弁は法廷弁論にはふさわしくなくただ歴史にのみ適切であることを主張し、以上の文体論をキケロ、ルキアノス、リブシウス<sup>40)</sup>の高評に語らせることによって結んでいる<sup>41)</sup>。

これまでの紹介によって、ホッブズの『戦史論』が歴史論としては、全面的にトゥキュディデースに拠りかかっており、内容的に充分なものといえないにもかかわらず、根本的な点では透徹した認識を含むものであることが明らかになったと思われる。残された資料にのみ語らせ、行為の結果としての事実だけを列記する歴史叙述を歴史の典型とする素朴な実証史観からすれば、トゥキュディデースの歴史は、余りにも合理化された歴史であろうし、討議演説の作為性を容認するばかりか、高く評価するホッブズの歴史への関心は、歴史(史実)そのものへの関心ではないことも明らかであろう<sup>42)</sup>。ホッブズの関心は人間は歴史を貫いていかに行為するかに据えられているといつてよい。

人間がいかに行為するかという事実への関心は裏がえせば人間はいかに行為すべきかへの関心に他ならない。ホッブズが両者の乖離の大きさを充分白覚していたであろうことは、未だ行為の規範が何であるかに沈黙を守っていること

39) Cf. *De Corpore*, E. I, pp. 1-2. *Elements*, *op. cit.*, p. 1.

40) ホッブズは彼の『政治学』*De Doctrina Civili*の名を挙げているが、その穩健なマキャヴェリズム(Meinecke, *a. a. O.*, S. 234. 邦訳270ページ)に共鳴するところがなかったとは考えがたいように思われる。

41) *E. VIII*, pp. xxx-xxxii.

42) Cf. 佐々木毅, 前掲書, 262ページ, 注90)

から明らかであろう。

前稿と本稿で跡付けたように、人間と政治にかんするホッブズ固有の認識は、そのもっとも特徴的な主張を含めて、すでに相当に獲得されていると結論してよいであろう。そしてのちの社会哲学と初期ホッブズの歴史への関心との内面的関連は、第一に、後者が教えた事実認識が前者の経験的基礎を提供したこと、第二に後者の方法的に人間の行為を動機→結果の連関で把握する視点＝〈情念→政治〉論が、一層の合理化・洗練によって前者へとうけつがれたことに求められてよいだろう。そしてヒューマニスト・ホッブズがペシミストであった理由を問うならば、絶対王政の危機が新しい市民階級の権利主張によってすでに露呈し、内乱という政治権力をめぐる闘争を予想させるほどにまで激化しつつあること、対外的には前世紀来断続し来った国際戦争（宗教戦争）が説明するであろう。

本稿を終るにあたり、最後に確認すべきことは、初期ホッブズが合理主義的ヒューマニストとしてすでに十分に固有の思想を確立しているにしても、前稿と本稿で紹介・検討した「トウキュディデース論」の直接の延長上に、その画期的な社会哲学が結実したのではないということである。第一に、近代市民社会の生誕を告知する、ホッブズの自然権から出発する新しい自然法理論が未だみられないし、自然権からの出発を可能とした「人間の自然的平等」性の明確な認識を欠いている。第二に、その画期的な自然権—自然法理論の論理化を可能とした公理—演繹的方法にホッブズは未だ出会っていない。

その意味で、すでにその基調を確立していたホッブズの人間と政治への視点が社会哲学へと具体化されるためには、自然学との出会いがその転回支点を与えなければならなかったといえるであろう。ホッブズ社会哲学の成立には、初期ホッブズの人間観と反動的政治観が自然学的認識論を介して自己革新されなくてはならなかった<sup>43)</sup>。この点の追究が次稿の課題となる。 (1976・9)

43) もとより自然法学そのものの研究の開始（または深化）がもう一つの課題であることは言うまでもない。

〔尚，本稿を作成する上で指導教授平井俊彦先生に訳文の原文との対照による  
検討の労をとっていただいたことを記す。〕